

令和7年度学校評価報告書

1 本年度の重点目標

1 基礎学力の向上	①授業が分かる生徒の割合70% ②家庭学習時間90分の確保 ③各学科における資格取得者数の増加 ④様々な進路希望に対応した指導体制の整備 ①円滑な連携事業の展開 ②小中学校への積極的な学習支援 ③外部講師による特別授業の実施 ①欠席、遅刻、早退の減少 ②元気な挨拶と清楚な身だしなみの指導 ③奉仕活動、体験活動の充実 ①計画的、組織的な進路指導の実施 ②三者面談や二者面談の実施 ③専門講師による講習会の充実 ①学校生活の満足度/95% ②全国規模の上部大会へ出場・参加/6件 ①各種コーディネーター等の育成促進 ②改善に向けた各種評価の有効活用 ③インターネット、新聞、テレビを活用した情報発信 ④防災体制の不断の見直しと構築
2 「チーム登米総」一丸で指導	
3 基本的な生活習慣・学習規律の確立	
4 希望進路100%達成	
5 特別活動の活性化	
6 信頼される学校づくり	

2 自己評価結果に対する学校関係者評価

A 達成している B おおよそ達成している C あまり達成していない D 達成していない

評価分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		自己評価結果	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
特色ある教育活動	① 学科間連携について	B	・令和5年度に専門学科の垣根を越えた学びを実現するため、生徒たちによる「模擬株式会社設立準備委員会」を立ち上げ、生徒が主体となり、各学科で培った知識や技術を最大限に生かして課題に取り組むことで、地域とつながる力や、プロとしての意識、未来を切り拓く起業家精神を育むことを目標に取り組んできた。また、教職員も学科長会などを通じて密に連携し、生徒の挑戦を全力で支える体制を整えて取り組んできた。今年度は農業科の生徒が作ったリンゴジュースを商業科の生徒が登米市産業フェスティバルに出展し販売をするなどの活動を行った。これまで「模擬株式会社設立準備委員会」については3年間続けてきたが、委員会や模擬株式会社を中核とした学科間連携は十分に進展したとは言えない状況が続いており、その一方、各学科主導による地域連携は着実に進展してきた。現在、創立10年の節目を迎える中、今後の学科間連携及び地域連携の在り方を検討しており、その中で、従来の委員会方式は終了し、専門学科中心の活動を継続しつつ、新たな学科間連携の体制への移行を検討している。	B	B
	② 地域連携について	A	・今年度も各学科を中心に地域連携事業をさらに発展させ、様々な学習活動を実施することができた。特に小中学生の段階で、地元登米の素晴らしいを伝える「郷土愛」の教育と地元の産業についてよく理解する「キャリア教育」が必要であると考え、地域貢献や出前授業を積極的に実施した。今後とも各学科の地域連携の取組を一層充実させるとともに、登米市教育委員会、登米市産業経済部、東部地方振興事務所、一般社団法人LINKなど地域の関係機関と連携を深めながら、地域に根ざした活動を展開していくことにより、地域社会とともに成長できる学びの場を創出していきたい。 【農業科の取組】 ①地域の農家での専門インターンシップ ②地域農家による肉牛の見方の指導 ③みやぎ県民大学でのリンゴジュースづくり ④ななだ稲作部会との生育調査 ⑤登米市産業フェスティバル ⑥ななだ秋まつり ⑦登米市給食へのレシピ提供 ⑧上沼コミュニティまつりへの参加 ⑨東和小学校への出前授業 ⑩伊豆沼農産との連携による海外の学生の体験授業の受け入れ ⑪道の駅での給食レシピの弁当販売(予定) ⑫磐乃井酒造での日本酒づくりの学習 【機械科の取組】 ①企業見学の実施(迫りコー、トヨタ自動車東日本、トヨタ東北、ジャムコ、東京発條、三光化成) ②登米市と連携し、産業フェスティバル/ベルティ作成。地域企業とのコラボ運営 ③JMT、迫りコー、登米精巧と連携し、小学校へのものづくり体験教室 ④中田教育事務所と連携し、夏休みもの作り教室 ⑤登米地域のマイスター、名工との協体制の構築 ⑥森林協同組合と連携し、啓蒙活動の実施 ⑦気仙沼地方振興事務所と連携し、南三陸町の企業でのインターンシップを実施(今後、登米市内の企業との連携も模索中) 【電気科の取組】 ①企業見学(東北電力女川原子力発電所、ユアテック人財育成センター、東北計器工業)や登米電気工事事業協同組合青年部との交流会を実施(クラフトマン21) ②東北職業能力開発大学の協力のもと、ものづくり充実支援の指導をいただいた 【情報技術科の取組】 ①東北職業能力開発大学の協力のもと、電子・情報関連技術関連の体験授業と講話をいただいた(クラフトマン21) ②企業と連携し東郷小学校、登米小学校、北方小学校への出前授業(プログラミング教室)の実施 ③課題研究で上沼小学校へ教材提供を行った ④登米市産業フェスティバルにおいて、合同会社オフィスワイルと連携しプログラミング教室を運営した ⑤登米市産業フェスティバルやT-cafe(宝江)に出展し、クレーンゲームやLEGOロボット体験会を実施(工業を知ってもらう) 【商業科の取組】 ①三井住友銀行仙台支店および東北学院大学を訪問し、企業見学・上級学校見学を実施した ②外部講師を招き、ビジネスマナー研修会を実施した(産業人材育成プラットフォーム事業) ③外部講師による貯蓄・積立などの資産運用に関する研修会を実施した(SMBCコンシューマーファイナンス) ④課題研究(情報班)では、地域の洋食店と連携して食事メニューの制作に取り組んだ。・店主の思いや提供食材についての調査を行い、メニュー表を作成し、現在も店舗で使用されている。・日本酒ラベルの制作にも携わり、日本酒醸造の工程や地域の風土を学んだうえでデザインを行った。・制作したラベルは蔵元でプレゼンテーションを行い、生徒が企画意図を説明した。選ばれたラベルは近日中に商品化され販売される予定である。・登米市産業フェスティバルにも蔵元とともに出展し、活動を紹介した。⑤ 課題研究(観光班)では、「株式会社とよま振興公社」を訪問し、『みやぎの明治村』を中心に登米市内の施設を見学するとともに観光事業に関する講話を受けた。・『教育資料館』の施設や環境を活用し、地域の観光資源を体験的に学びながら、その魅力を生かす方法を考える形で高校生による観光ガイドを実践した。・今後も地域に貢献する活動を進める実践的な学習を、高校生が主体となって行う予定である。⑥ 登米市産業フェスティバルに出展し、学科間連携で開発したリンゴジュースを販売した。 【福祉科の取組】 ①地域福祉施設の協力のもと、全学年、校外福祉施設での介護実習を実施 ②登米市社会福祉協議会の協力のもと、地域高齢者との交流会を2回実施(10月敬老交流会、12月クリスマス交流会) ③上沼小学校5年生との交流会および福祉教育の出前授業を2月に実施。 【全体】 登米市のイベントである「登米市産業フェスティバル」において、地元企業と学校のコラボレーション企画として参加した。生徒は当日の運営補助だけでなく、企業の出展に向けた企画段階から関わり、準備に取り組んだ。イベント当日は、企業商品の説明や提供商品の操作などの業務を担当し、出展活動に携わった。	A	A
	③ ICTを活用した学びの充実	B	・学校設定科目「学びの基礎(1年)」において、個別最適な学びの実現を目指し、一人1台のタブレット端末を活用し学習アプリを用いた取組を進めてきた。次年度よりリクルートの学習支援アプリ「スタディサプリ」を導入し、生徒が主体的に学習に取り組む習慣の確立と、個々の学びに応じた指導の実現のさらなる充実に取り組みたい。また、新たな取り組みとして、今年度は教職員の授業力向上を目指し、生成AI活用研修会を教務部、情報管理部が連携して実施した。	B	B

学校関係者評価委員会における意見	・地域を味方につけることと、ICTへの一致した取組が登米総には似つかわしい。 ・小学校でのものづくり体験教室や出前授業など、地域企業との連携イベントにも新たに組み込んでおり、地域に根ざした活動、その充実が図られている。 ・小中学校との連携は大事であるが、まずは高校生自らが地域資源の価値に気づく必要があり、そのための学習・体験機会をつくってほしい。
------------------	--

学習活動	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		自己評価結果	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
		① 基礎学力の向上	A	・タブレット端末を活用した生徒の学ぶ意欲を引き出す授業や教材の研究が進んでおり、家庭学習や長期休業中の課題配布に加え、連絡ツールとしても活用されている。学校評価の「学ぶ意欲を引き出し、学力を身に付けられるような授業が行われている」の質問に対する肯定的な意見は調査対象全てで前年度と比較し、80%代後半から90%代と高い値を維持しており、「当てはまる」(最も肯定的な意見)の回答がどの対象でも倍以上に増えていることから、今後も効果的な取組や研修等を計画していきたい。 ・ICTを活用した学び直しについては、授業や家庭学習におけるアプリの活用状況等を検証し、来年度から学習支援アプリを変更することとした。今後は、本校の生徒に合った学習スタイルや生徒の実情を考慮し、関係各所と連携しながら「主体的・対話的で深い学び」の実現を図りたい。	A
② 「チーム登米総」一丸での指導	B	・公開授業研究会や研究授業週間、学校公開週間等を設け、ICTを活用した授業や指導方法の改善を目的とした研究を継続的に実施している。今年度は県の総合教育センターや本校の情報管理部と共同で生成AIの活用研修会を実施し、教材研究だけでなく校務のDX化についても校内で連携して取り組んだ。 ・不登校や入院している生徒に対する「多様な学習コースに対応した学び」(同時双方向遠隔授業や通信教育による授業)について、マニュアルを整備するとともに各学年や分掌部と連携し、個別の対応を図った。今後も校内で連携した対応が取れるような体制を構築していきたい。	B	B	
③ 基本的な生活習慣・学習規律の確立	B	・本校では各教科・学科で学習課題や実習レポートが課されていることもあり、全体としては一定の学習時間が確保されている。その中でも国家資格や検定等の取得を目指している生徒が多い学科の生徒の学習時間が多い傾向にあるが、生徒の平均学習時間は県平均よりも少なく、スマートフォンの使用時間とある程度の相関がみられる。今後は学年や進路指導部と連携し、希望する進路目標の達成や目的意識を向上させ、主体的な学習に結びつくよう指導していきたい。 ・登米総授業スタンダードとして生徒・教員の行動目標を定めて7年目となったが、一部の生徒に学習規律の乱れが見られているため、生徒指導の強化や内規の見直し等を行い、校内一丸で対応していきたい。	B	B	

学校関係者評価委員会における意見	・主体的・対話的な学びをどんどん進めることで、先生方や生徒の自信もつくと思われる。 ・基礎学力の向上においては、昨年度から課題として取り組んだ改善活動がよい方向へと向かい、それが結果として現れたものと評価する。 ・社会で求められるのはコミュニケーション力である。基礎学力の定着に加え、自分の考えを論理的に整理できる方法・プレゼンテーション力の育成をお願いする。
------------------	--

生徒指導	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		自己評価結果	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
		① 挨拶の励行、身だしなみ指導、遅刻指導の徹底について	B	・生徒・保護者・教職員から肯定的な評価が多く、本校の生徒指導の取組は概ね高く評価されている。「愛」を掲げ、生徒一人ひとりを大切にしつつ、規範意識と基本的な生活習慣の定着を目指してきた。具体的には、全教職員による遅刻指導や朝の昇降口での声かけを継続し、生活リズムの確立を図った。また、昼休みの巡視を計画的に行い、生徒の様子を把握しながら問題行動の未然防止に努めた。さらに、学科間の連携が進み、指導内容の統一により生徒の生活態度に改善が見られ、特別指導の件数も減少している。 今後は朝の昇降口指導を柱とし、学科・学年の連携を強めながら、生徒の実態に応じた継続的できめ細かな支援を行い、生徒が主体的に学校生活を送れるよう成長を支えていく。	B
② 部活動、生徒会活動の活性化を図り、学校行事を成功させる	A	・部活動は生徒・保護者・教職員から高く評価された。加入率は減少傾向にあるものの、運動部・文化部ともに特性を生かした工夫が行われ、充実した活動が展開された。運動部では技能・体力に応じた安全な指導が続き、文化部では創作や発表の機会を通して達成感が得られた。顧問が生徒の主体性を尊重し指導を改善したことが、生徒の満足度向上につながった。今後は活動の魅力や積極性に発信し加入率向上を図るとともに、活動状況や成果を踏まえて部活動数や予算配分を検討し、バランスの取れた体制を整える。 ・生徒会活動も肯定的評価が80%を超え高く評価された。生徒会役員が主体的に活動し、産業祭の打ち上げ花火も地域から好評を得た。また、12月には生徒会の独自企画として、スペシャルウィンターデー(全校クリスマス会)を企画・運営するなど、生徒が主体的に活動をした。一般公開の来場者増加により活気が戻り、各委員会では課題解決に協力し責任感や協調性が育成された。今後は生徒の意見を積極的に取り入れ、話し合い・振り返りの機会を充実させて活動目的と成果を明確にし、より多くの生徒が関わられる体制を整えて自治活動の質を高める。 ・学校行事も高い評価を受けた。スポーツ大会や産業祭、修学旅行などで生徒が企画から運営まで主体的に関わり、協働の大切さや互いを尊重する態度が育成されたことが評価の要因である。今後は、生徒の主体性がより発揮される環境を整え、意見を反映した行事改善を進めるとともに、保護者に行事の目的や意義を丁寧に伝え、意見交換を通して家庭との連携を強めていく。	A	A	
③ 個々の生徒の実態に即した指導を展開する	B	・昨年度より問題行動は減少し、一部に規範意識の低い生徒はいるものの、多くの生徒が意欲的に活動し、落ち着いた学校の雰囲気が形成されている。全校・学年集会で指導方針を共有し、学年と生徒指導部が連携して問題行動に組織的に対応したことが成果につながった。今後は積極的な生徒指導を継続していく。 ・いじめ調査や面談を定期的に行なった結果、生徒84%・教職員98%が肯定的に回答したが、保護者の肯定的回答は前年度より低下した。学校の取り組みが十分伝わっていないことや、家庭から見えにくい人間関係への不安が影響している可能性がある。否定的回答には小さな悩みが潜む可能性もあるため、数値だけに頼らず慎重な分析が必要である。 ・SNSや家庭環境など複雑化する課題に対応するため、今後も定期的なアンケートと校内での情報共有を進めるとともに、生徒が相談しやすい環境づくりと相談窓口の周知を図り、教職員が連携して未然防止と早期対応に取り組んでいく。	B	B	

学校関係者評価委員会における意見	・生徒を信じて、主体性を持たせ、自分で判断できる力をどんどんつけてほしい。ネクタイ・リボンの改革は、時宜に思っていると思う。 ・問題行動の減少から、生徒一人一人と向き合う教職員の方々の熟慮ある取組が成果に結びついているものと感じた。 ・部活動の加入率こそ減少傾向とのことであるが、部活動をとおした指導による効果もあると思う。
------------------	--

3 次年度の課題と改善方策

次年度の課題	改善方策
① 特色ある教育活動	令和8年度においては、各学科における地域連携の取組をさらに充実させるとともに、外部の関係機関から御協力をいただきながら、地域に根ざした活動を展開していく。特に、小・中学校との連携を強化については、体験機会の提供だけではなく、その質や学びの充実感をさらに高めていくなど、地域の子供たちとの関わりを通じて、本校生徒一人一人の成長につながる教育活動へと深化させていきたい。また、学科間の連携を促進するため、地域連携に関する情報提供や、地域資源の共有化等の具体的な取組を進めることにより、専門教育の一層の充実と取組の成果発信を強化し、本校の特色をより明確にするよう努めていきたい。
② 「チーム登米総」一丸での指導	学校評価アンケートにおいて、授業改善に対する教職員の手応えと生徒の実感との間に差が見られる結果となったことから、生徒の学習意欲を高め、基礎学力の定着を図るためには、生徒の目的意識の向上とともに、生徒の「わかる、できる」という学びの実感をより高める授業づくりに一層取り組むたい。「チーム登米総」として、校内だけではなく、保護者との連携を大切にしながら、全教職員が一丸となって基礎学力の向上と学ぶ意欲の育成に努めていきたい。また、将来生徒が社会に出るために求められる力や、自分に足りないものに気づき、主体的な学びへとつなげることを目指す。
③ 個々の生徒の実態に即した指導を展開する	生徒一人ひとりに応じた指導を行うため、個人面談や学年集会等を通じて、積極的な生徒指導を教職員が一丸となって展開し、問題行動には学校全体で組織的に対応していく。いじめの未然防止および早期発見に向け、いじめ対策委員会等の機能を活用し、情報共有の迅速化と組織的に対応に努める。生徒一人一人が安心して学校生活を送ることができるよう、教職員が一丸となって支援体制の充実と指導に努める。